

「ゼツメツ少年」 重松 清 著 新潮社 2013年9月発行

学生時代、ブックハンティングに参加した際に選んだ本です。「ゼツメツ寸前の僕たちを物語の中に隠して」と帯に書いてあり、何気なく選んだ記憶があります。当時、私はミステリー作品が好きでよく本を読んでおり、東野圭吾や宮部みゆき、湊かなえ作品を好んで読んでいました。重松清の作品を手にとったのはこの時が初めてで、何の事前情報もなく「ゼツメツ少年」を読み、言語化できない感情に沈んだのを覚えています。

「センセイ、僕たちを助けてください」と、ある小説家のもとに、手紙が届きます。送り主である、学校や家で居場所をなくした三人の少年少女は、自分たちを「物語」の中に隠してほしいと望みます。今の環境では生きていけないことを「ゼツメツ」と称して、ゼツメツしただけで他の道を模索する三人の少年少女と、その不思議な願いに応じて、彼らのお話を綴り始めたセンセイのお話です。

著書の重松清は現代家族に焦点を当てた作品を多く書いており、そのどれもが後悔、葛藤、いじめ等重たいテーマを主軸にしているように感じます。ですが、文章は平易でサラッと読むことができ、著者の伝えたいことがストレートに伝わります。非常に綺麗な文章を書く方だと私は思います。

「大事なのは想像力」、「人間は誰もが物語を必要としている」、本をよく読む方、今この私の推薦する図書を読んでもらっている方には刺さる何かがある作品だと思います。興味があれば是非読んでみてください。